

1960年代の英語圏の書籍・論文に 見られる創価学会研究

井上比呂子

目次

はじめに

1. Brannenの研究—創価学会発展の歴史と池田大作という人物
2. Whiteの研究—三代会長の人物像
3. Datorの研究—創価学会発展の要因
4. Métrauxの研究—教育・平和活動への言及
5. その他のSGI研究

終わりに

はじめに

池田大作創価学会第三代会長（現名誉会長）についての研究は、英語、中国語、韓国語をはじめとし様々な言語で著作や論文が出版されている。それは、創価学会が大きく会員数を拡大し、公明党を結成し、社会に新たな新興宗教団体としての勢力を発揮し始めた1960年代にさかのぼる。しかし、それらの研究の大半は、宗教団体としての創価学会について、その教義、組織論、あるいは公明党と中心とした政治との関わりについてのものが多い。本稿では、その中でも英語圏で発表された創価学会や池田SGI（創価学会インタナショナル）会長に関する著作や論文をとりあげ、その研究内容について分析することを目的とする。今回は、特に1960年代から80年代に出版された書籍と論文に焦点を絞り、池田大作氏（以下、池田と記す）がどのように海外の識者・学者から論じられてきたのか、その思想哲学・功績・人物像の観点から考察する。その際、創価学会の1950年代から60年代への大幅な発展、1960年からの海外SGIの活動についても言及し、併せて初代、第二代、そして三代会長の人物像やリーダーシップ、創価学会に与えた影響についても原文をあげながら紹介していきたい。

1950年代、60年代、…90年代、2000年代と、創価学会は変わりゆく社会の中で発展を続けた。特に1960年代から池田の活動も世界規模で広がることにより、当然その活動に対する外部の評価も変化してきている。彼は宗教活動のみならず、創価学園をはじめとする幼稚園から大学へ至る一貫教育機関の設立、民主音楽協会や富士美術館といった文化芸術機関の設立など、仏法を基調

とした平和・文化・教育運動を根本に多彩な活動を展開している。さらに、海外の識者との対談集も数十冊を超え、世界の大学や学術機関からの名誉学術称号は2007年1月時点で200を超えるまでになっている。

1. Brannenの研究—創価学会発展の歴史と池田大作という人物

今回、英語圏で出版された創価学会研究を調べるにあたり、20を超える書籍・論文を読んだが、中でも特に古い時期に出版されたのが、Noah S. Brannen の “*Soka Gakkai-Japan's militant Buddhists*” である⁽¹⁾。1968年は、第二次世界大戦後の1950年代から創価学会の会員数が劇的な増加を遂げた後であり、政治的側面から見ると、公明党が結成された後の時期であった。また設立された教育機関に関しては、創価学園のみであり（1968年）、まだ創価大学は開学しておらず（1971年に開学）、創価一貫教育の構想はあったが実現途中の時であった。

*Soka Gakkai-Japan's militant Buddhists*では、まず日本においていわゆる「新興宗教」と呼ばれるものの定義をおこない、その成功した例として創価学会をあげ、なぜ学会が600万もの信者を抱えるに至ったかについて分析している。Brannenは、創価学会がその熱心な布教の仕方や緻密な組織体制により、多くの学会員を獲得するのみならず、公明党という政党の支持母体となるなど、政治的にも成功を収めていると評している。また、創価学会の発展は戦後の社会情勢や人口の増大、経済の拡大との関係抜きにしては語れないとした上で、人々の精神状態が不安定で何かよりどころとなるものを求めていた当時いくつか興ってきた新興宗教の中では、創価学会は非常にシンプルな方法で現世の利益を獲得し、人々を幸福にする方法を示したという点で抜きん出たと考察を加えている。加えて、教学（日蓮の仏法を学習すること）にも力を入れ、会員一人一人が単にお経をあげるのではなく、法華経の教義にも精通することが必要とされ、理論をふまえた仏法の実践を進めたことにもその拡大の一因を見ることができるとしている。

人気の高い宗教の一つの条件として、その教団に立つトップ、つまりリーダーの資質というものがあるが、Brannenはマックス・ウェーバーの「カリスマ性」という言葉をひいている⁽²⁾。その意味で、創価学会の第二代会長である戸田城聖氏はカリスマ性を備えていたと評している。

この本では、創価学会の歴史として、初代会長牧口常三郎氏の経歴から始まり、彼が1930年に創価教育学会を設立したことや、その思想の独自性について論じている。牧口は、教育の目的はひとりひとりの幸福の追求であり、幸福は価値の創造によってのみ実現されるとした。そして教育とは、「美・利・善」という価値を創造しうる人間を育成することにあるとしている⁽³⁾。さら

⁽¹⁾ Noah S. Brannen, *Soka Gakkai-Japan's Militant Buddhists*, John Knox Press, 1968.

⁽²⁾ マックス・ウェーバーは、『職業としての政治』のなかで、伝統的支配（宗教など規範や従来の伝統的なことを重視若しくは神聖視し、為政者に従う）、合法的支配（法に基づく支配、法令や規則、ある程度持続した文化の不文律に定められているのだから従う）という合理的支配の2様式と対比して、伝統にない新しい様式で従前の規範を超えて大衆の支持を取り込んだ統治の様式であるカリスマ的支配を支配の第3類型として挙げている。（マックス・ヴェーバー（脇圭平訳）『職業としての政治』岩波文庫、1980年）

⁽³⁾ 牧口常三郎 『牧口常三郎全集 第五巻 創価教育学体系（上）』第三文明社、1982年。

に、牧口の思想を基盤として確立された創価学会の本当の力が発揮されるのは、第二代会長の戸田にバトンが手渡されてからだという。

戸田は牧口の一番弟子であり、牧口と共に日本の軍国主義に反対して検挙された。牧口は国家神道への従属を拒み、日蓮正宗側からの神札を祀る提案も言下に拒否した。1943年7月6日、治安維持法違反並びに不敬罪の容疑で検挙・連行され、当時理事長であった戸田も検挙された。牧口は獄中においても不退転を貫き、1944年11月18日に東京拘置所内病監で死去した⁽⁴⁾。戸田は翌1945年7月3日に豊多摩刑務所より出所し、獄死した師の恩に報いるために、この後創価学会の拡大を大きく進めていくこととなる。1951年5月3日の戸田の第二代会長就任式で、彼は「折伏75万世帯を達成できなければ、戸田の葬式の必要はない」という有名な折伏宣言を行う⁽⁵⁾。そこで、「広宣流布」とは何か、「折伏」とは何かなど基本的な語句についての説明があるが、Brannenは戸田のことを以下のように述べている。

His keen administrative ability, charismatic personality, and bellicose spirit, his struggle up through the ranks by sheer hard work, his aggressiveness and masculinity coupled with a keen sensitiveness, a sense of humor, and an astute mind—all these qualities added up to “charisma” and an irresistible leader (p.87)

このように「彼の鋭敏な経営に関する能力、カリスマティックな性格、口論好きな精神、勤勉さ、鋭い敏感さと共にある攻撃性や男らしさ、ユーモアのセンス、また洞察力の鋭さ——それら全てをまとめると『カリスマ』であり、圧倒的なリーダーということになった」と、彼の人物像について分析している⁽⁶⁾。ここでのBrannenの視点は、一見した彼の特徴をつかんでいるようにみえるが戸田の内面的な奥深さまで洞察するような多面的な見方ができていたとは言えない。

戸田第二代会長の指導の下、創価学会は飛躍的な会員数増加を遂げた。戸田は1957年12月に折伏75万世帯を達成した翌年の1958年4月2日に逝去するが、彼の死後2年後に創価学会は会員数を80万から130万に増大させる。ここでBrannenは創価学会のピラミッド型組織についてふれるが、その組織は複雑ではあるが非常に機能的で優秀であると評している。

創価学会の海外進出について、Brannenはそれを池田の功績として高く評価している。1960年5月3日に創価学会第三代会長に就任後、国内の組織の発展をはかるとともに、池田は海外への訪問、布教を積極的に推進することとなる。池田と彼の率いる海外訪問団がアメリカ、カナダ、ブラジルを訪問した後、1968年にはS G I（創価学会インターナショナル）の会員数は15万人を数え

⁽⁴⁾ 年譜・牧口常三郎 戸田城聖編集委員会・編、『年譜・牧口常三郎 戸田城聖』第三文明社、1993年。

⁽⁵⁾ 実際の会長就任の決意では、「私が生きている間に75万世帯の折伏は私の手です。もし私のこの願いが、生きている間に達成できなかったならば、私の葬式は出してください。遺骸は品川の沖に投げ捨てていただきたい」とある（戸田城聖、『戸田城聖全集 第三巻 論文・講演編』聖教新聞社、1983、433頁）。

⁽⁶⁾ Brannen, *Soka Gakkai-Japan's Militant Buddhists*, p. 78.

た。

池田に関しては、19歳の時の戸田との出会いから創価学会への入信、青年室長としての活躍や戸田の直結の弟子として戦うまでが詳細に書かれており、彼の折伏の手腕や戸田への献身的な姿勢が、後の1960年5月3日に彼が第三代会長に就任する要因のひとつであったと述べている。ここで、Brannenは1968年当時の創価学会の活動について、その機関紙である聖教新聞、潮出版社、民主音楽協会（民音）、公明党などとの関係について言及している。Brannenは池田の印象を、彼は「社会情勢に敏感でない人はリーダーになるべきではない」と毎日できるだけ多くの新聞や定期刊行物に目を通していたと述べている。昼食時には、妻の弁当を持ってくることもあり、家族は質素な大田区の家に住み、見栄をはることもない誠実な人柄が伺えるとしている。また、興味深い点として池田と戸田とを彼らの外見が与えるイメージから比較してある箇所もあり、池田のきちんとした髪型、清潔そうな服装、スピーチでの礼儀正しさは、彼の師匠であった戸田とは全く逆のイメージを与えると記している⁽⁷⁾。

2. Whiteの研究——三代会長の人物像

次に、1969年出版のWhiteの書いた日本の政治における創価学会についての論文をみてることにする⁽⁸⁾。Whiteは、軍国主義を経て敗戦、戦後の経済発展の中で民主主義を求める声が高まった時代背景の中で、創価学会がどのように発展してきたか、主にその日蓮仏法の教義や会長のリーダーシップについて政治的な観点から分析をしている。彼は、強いリーダーシップは社会運動や日本の新興宗教に見られる共通の特徴であるとまず指摘する。そして、創価学会もその例外ではないとし、初代牧口会長の卓越した教育哲学、実用的で価値創造を求める思想は当時の日本においては新しく、以前には見られないものであったとしている。また第二代戸田会長に関しては牧口とはまったく異なるタイプであったと評している。常に教育の道を進んできた牧口と違い、戸田は一度は教育の道を歩むも挫折し、出版社、私塾、印刷業など様々な職業を経験する。さらに彼は商才にもたけており、牧口が設立した創価教育学会の財政的な面を担っていく。本書では、牧口と戸田を以下のように比較している。

In contrast to Makiguchi the scholar, methodical, steady, persuasive, puritanical in personal habits, meditative, and speculative, Toda was a hard-sell pitchman for his faith: frank, vigorous, often rude, talkative, fond of tobacco and alcohol in quantity, impulsive, and activist (p.102).

牧口を学者であり、几帳面でしっかりした、説得力のある、非常に厳格で理論的な性格と評する

⁽⁷⁾ Brannen, *Soka Gakkai-Japan's Militant Buddhists*, p.88.

⁽⁸⁾ James Wilson White, *Mass Movement, Militant Religion and Democracy: The Soka Gakkai in Japanese Politics*, Doctoral Dissertation, Stanford University, 1969.

一方で、戸田の飾らずに腹を割って話す性格や、精力的で、時には無作法なところもあり、弁が立ち、煙草と酒を好み、推進力があり、活動家であった部分を評して「強烈な売り込みに長けた宣伝マン」であると対比させている⁽⁹⁾。この見方は、よく戸田のイメージとして評される点と違わず、一面的なものともいえる。

そして、現職(1969年当時)の創価学会会長である池田氏については以下のようにふれている。
Although an extremely able organizer, as was Toda, Ikeda is also and “organization man.”
Smooth and urbane, persuasive rather than vituperative, . . . (中略) More subtle and flexible, less open and ideological style than Toda, he is very much the image of the leader of an organization which has arrived and feels secure and confident (p.103).

池田の人物像について、強烈な有能さでリーダーシップをとっていた戸田と比べて、池田は「組織人間・組織作りの上手な人(organization man)」だと評している。スピーチが上手く、洗練されており、毒舌を振るうというよりは説得力のある話をし、敏感で柔軟性に富み、戸田ほどその思想の表明があからさまではない部分をあげて、池田を安心できる確実な「組織のリーダー」であると評している⁽¹⁰⁾。池田の組織を牽引する政治的手腕や、論理的で忍耐強く、決断力にあふれた行動は、過去の初代、二代会長よりも強く学会を印象付けるものとなったことを示し、彼は多くの会員の尊敬と信頼を集めるものとなったと半ば、一部の会員の間で池田が崇拝化されているとまで言及している。崇拝化とまで言ってしまうと極端な言い過ぎのきらいもあるが、彼の人格や振る舞い、彼自身の活動が創価学会の発展に与えた影響は甚大なものであったことを示す一例といえよう。

Whiteは創価学会が発展した要因の一つとして、非常に中央集権化が進んだ組織体系をあげている。本部、支部などの中に本部長などの役職をおき、さらに班と呼ばれる小グループの体制をとることで、座談会と呼ばれる会員同士の草の根の活動も可能にしながらも、本部などからの指示も迅速に伝わる形態をとり、実際にそれが機能している点を高く評価している。これは、前出のBrannenも言及していた点であり、多くの創価学会研究において、その組織体制の優秀さは評価されている。

この本のユニークな点は、三代にわたる会長の時代の布教の様子の違いに関しても言及しているところである。例えば、初代牧口会長の時は、主に教育者が会員の場合が多かったため、議論の中心や会員の勧誘はより学術的で教育学的視点を伴うものであった。戸田の時代には学会の折伏体制は非常に熱を持った戦術的なものとなり、他宗を批判し破折するという行為や言動は、創価学会以外の人の目から見ると時には常軌を逸しているようにも見えたという。だがそれはどこ

⁽⁹⁾ James Wilson White, *Mass Movement, Militant Religion and Democracy: The Soka Gakkai in Japanese Politics*, p. 102.

⁽¹⁰⁾ James Wilson White, *Mass Movement, Militant Religion and Democracy: The Soka Gakkai in Japanese Politics*, p. 103.

までも日蓮仏法に照らし合わせた正しい教義を貫こうとした姿勢のあらわれであるとしている。

これら初代、二代会長に続いて池田の時代には、戸田の時代のいわゆる「好戦的、攻撃的」ともいえる折伏スタイルは一般社会に対して創価学会の否定的印象を強めるとされ、布教のやり方はより節度をもった穏便なやり方に徐々に移行していった。この池田の新しい戦術は見事に成功し、彼は創価学会を社会的に受け入れられるべき宗教団体の一つとして社会に認知せしめることに大きく貢献をした。池田のスピーチに関しても、彼の長期的展望や組織としての信念をきちんと示すと同時に、短期的に達成可能な目標を提示するというやり方は、会員に対するより効果的な指導法につながるとして、彼の話術を高く評価している。また、戸田が実質的、個人的な利益や国家の発展などに言及するのに比べ、池田は時事的な問題にも詳しく、「人のために尽くす」といういわば利他主義的で献身的な姿勢を示しながら社会への貢献、利益、また全人類の恒久平和について深く論じている点についても言及している。彼は実際に1960年を皮切りにアメリカや欧州への訪問を続けており、その意味でも彼の国際的視野に立った宗教活動の先見性が見出されるとしている。また、池田は公式的に創価学会の会長としての立場もあるが、それは形式だけではなく、実際に多くの会員たちは池田との「師匠と弟子」という精神的きずなを持っており、この公式と非公式の役割一致という組織構造が、リーダーを頂点とする創価学会の組織をより強固なものにしているとWhiteは主張している。

創価学会の発展の要因として、卓越したリーダーシップの質や政党化⁽¹¹⁾に成功したことなどが上げられているが、なかでも価値論などの理論的背景と仏法の教義を現実社会の構造に即して、実用的で即効性のある宗教として位置づけたこと、それを誰にでもわかりやすい実践方法で示したことが他の宗教とは異なる特徴であったと述べている。以上の観点により、戦前の創価教育学会を経て戦後の創価学会の設立をふまえると、それぞれの特徴を持った会長は三代にわたって変わりながらも、会員は性別、年齢、社会的階層を問わず幅広く増大し、その布教活動は進化し続けている点において創価学会は日本の歴史において戦後社会における類を見ない宗教団体の一つであると結んでいる。このようにWhiteは創価学会の組織構造についてふれるとともに、三代会長についてそれぞれの人格的特徴を比較するなど、独自の視点が見られるといえる。

3. Datorの研究——創価学会発展の要因

次に、Datorの著作「*Soka Gakkai, Builders of the Third Civilization*」について考察を試みたい。彼は創価学会を第三文明の構築者として位置づけ、創価学会の組織について、また日本の会員、アメリカの会員について分けて論じている⁽¹²⁾。

この本の結論部分では、創価学会が他の宗教団体よりもより成功している要因として、以下の

⁽¹¹⁾ 公明党は本格的な衆議院進出を意図して、公明政治連盟を経て1964年にして結成された。創価学会は支持母体のひとつである。

⁽¹²⁾ James Allen Dator, *Soka Gakkai, Builders of the Third Civilization*, University of Washington Press, 1969.

5点をあげている。

1. The Soka Gakkai offers a simple but complete explanation of the entire world.
2. The Soka Gakkai offers a Japanese explanation of the world. The Soka Gakkai, unlike Christianity, or even orthodox Buddhism in Japan, is not an “imported Religion.
3. The Soka Gakkai is not a “new” religion. While its phenomenal growth is postwar, and while its organizational beginning was just before the war, still it claims to be no more than a lay organization affiliated with the seven hundred year old Nichiren Buddhism.
4. Soka Gakkai is practical and “this-worldly.” The true purpose of religion, says the Soka Gakkai, is to given each person immediate, worldly, personal happiness.
5. While the Soka Gakkai stresses the equality of all members in that all are equal when they enter the Soka Gakkai, and social position is said to make no difference within the Soka Gakkai (thus, we have been told, the janitor of a bank may be a teacher and the bank president his pupil), the Soka Gakkai provides for intraorganizational ranking on the basis of individual effort (pp.136-139).

要約すると、1点目は、創価学会は世界観というものに対して、単純でなおかつ完璧な説明を提示している。2点目は、創価学会はいわゆる「輸入した宗教」ではなく、日本で発展した宗教として世界に紹介された。3点目は、創価学会はいわゆる戦後の「新しい」宗教ではなく、700年前の鎌倉時代の日蓮に端を発する仏教を基盤とする団体である。4点目は、創価学会は現世の利益を約束するなど、実用的で「世俗的」とも見られる部分を持つ。5点目は、創価学会にはその組織内特有の役職があり、会員の学歴や社会的地位は関係ない⁽¹³⁾。さらに、布教活動の徹底や会員同志の円滑なコミュニケーションがその組織を確固たるものにしてしていると評価している。彼の見解は、創価学会に対して批判的な部分も多いが、事実を的確に指摘している点は評価できるものである。

4. Métrauxの研究—教育・平和活動への言及

次に、Daniel A. Métrauxの著作を2点紹介したい。彼は、1960年代から数回にわたって日本に研究で滞在するなど、フィールドワークを通じたアジアの宗教・思想研究を専門とし、1992年に創価大学の客員研究員としても研究を行っている。彼の*The History and Theology of Soka Gakkai—A Japanese Religion*という著作は、創価学会についてその歴史や戦後の学会の発展、アメリカへの布教の様子や、世界へのSGIの活動の広がり、公明党の政治活動や創価学会と中国との関連などについて、歴史的、政治的、外交的な様々な観点から創価学会を論じている⁽¹⁴⁾。Métrauxは

⁽¹³⁾ James Wilson White, *Mass Movement, Militant Religion and Democracy: The Soka Gakkai in Japanese Politics*, pp. 136-139.

⁽¹⁴⁾ Daniel A. Métraux, *The History and Theology of Soka Gakkai—A Japanese Religion*, The Edwin Mellen Press, 1988.

冒頭で、創価学会は近代日本の歴史におけるユニークな現象であると述べ、このように広く行き渡った社会的運動として成功した仏法を基調とする宗教団体は他にはないと強調する。創価学会の目的は社会を仏法の見地から改革することであり、仏法をたもち、実践することにより、人々はより幸福になり、世界に平和がもたらされるとする。彼は、戦後のいわゆる「新興宗教」の発展の要因について、1. 「宗教の自由」の思想の流布 2. 第二次世界大戦中の政府の政策やイデオロギーの失敗 3. 戦後の多くの日本人の貧困、絶望、そして孤独をあげている⁽¹⁵⁾。創価学会の前身である創価教育学会の創始者、初代牧口会長の思想についても述べた後、戦後の戸田会長の活動について、それは日本全体を仏法を通して改革しようとする大きな試みであったと評している。戸田は仏法と社会を融合したものとしてとらえており、彼は創価学会の思想的・組織的基盤を彼の代で確固たるものとした人物として書かれている。

ここで、Métrauxは池田の功績の一つである、創価教育の思想を基盤にした一貫教育機関の設立についてふれている。これは先に述べた2冊の1960年代の著作では言及されなかった点である。Métrauxは、教育は創価学会の歴史と思想を語る上で欠かせない特別な役割を担っていると強調している。もともと創価学会の前身は教育者の集まりであった創価教育学会であったことにもふれ、初代牧口会長が教育者であったこと、また戸田会長の時代から創価一貫教育を作るという構構があり、それが池田の時代に実現したことについて述べている。1988年当時では、札幌に幼稚園、東京と大阪に小学校から高校までの一貫教育機関、東京の八王子に創価大学と創価女子短期大学を構え、アメリカとヨーロッパに語学研修センターを擁するなど世界に教育の舞台を広げている（2007年現在は、アメリカ・カリフォルニア州に4年制大学、大学院、また香港、マレーシア、シンガポールに創価幼稚園、ブラジルに創価幼稚園と創価学園を持つ）。著者自身が創価大学を訪問したときの感想も述べられているが、非常に設備の整った建物や図書館があり、教職員の労働条件もよいと述べている。大学の将来に関しても、まだ開校間もなくして日本を代表する私立大学とまではいかないが、将来そうなる可能性はあるであろうと指摘している⁽¹⁶⁾。Métrauxは巷に学会批判は多くあるものの、これらの教育機関は次代の人材の社会化に大きく貢献をしていると創価教育を高く評価している。

結論部分では、創価学会について以下のように述べている。御書を読み、題目をあげるといふ日蓮仏法の教義どおりの実践をすることによって、すべての人は自身の仏性を開くことができ、ひいては人々をも幸福にしていくことが可能であると主張する創価学会は、自身を13世紀の日蓮の思想を正しく汲む真実の教団であると強調している。このようにMétrauxの論点は、彼が日本に滞在経験があることから他の海外の著作に比べると、具体例が多く、わかりやすい反面、国内の研究者の論点とあまり変わらないという印象を持った。

⁽¹⁵⁾ Daniel A. Métraux, *The History and Theology of Soka Gakkai- A Japanese Religion*, p. 21.

⁽¹⁶⁾ Daniel A. Métraux, *The History and Theology of Soka Gakkai- A Japanese Religion*, p. 128.

Métrauxの2冊目の著作、*The Soka Gakkai Revolution*についても少しふれておきたい⁽¹⁷⁾。この本は日本語にすると「創価学会革命」ともいえるものであり、創価学会の歴史と教義からはじまり、第二次宗門問題、教育機関設立へのアプローチ、海外の創価学会について論じると共に、1章分を使って池田について述べている。前の著作との違いは、1994年に出版されていることもあり、宗門問題についても着目するなど、その当時の時代背景を反映しているものとなっている。彼は冒頭で、池田の数ある著作の代表作のタイトルでもあり、また創価学会の宗教を理解する上でキーワードとなる言葉、「人間革命」という概念について言及している。Métrauxは人間革命の意味は、仏法を根本にした一人の人間の内的人間革命・宗教革命と、個人の人間革命から波及する社会の革命、ひいては世界の変革にまでその趣旨を広げており、その意味で創価学会の活動自体を内的かつ外的な広がりをもつ『革命的な』ものであると評している。この本は、1992年に著者が客員研究員として創価大学に滞在中に書かれたものであり、同大学の北教授や中野教授、東洋哲学研究所の塩津教授とも接触があったと述べている。さらに、池田をはじめとし当時の創価学会会長である秋谷氏や副会長の西口氏についても謝辞を述べている。

本書での特筆すべき点としては、この本で池田を称するときには戸田の弟子 (disciple) という表記がはじめて出てくる⁽¹⁸⁾。これは、海外の研究者が創価学会を論じる際にも、学会が師匠と弟子という師弟観を根本にしているという社会認識が徐々にあらわれてきていることの反映といえよう。さらに、教育機関の設立についても、仏法を基調とした人道的で豊かな人間性を持った人間を輩出する教育という営みに着目した三代会長を他の宗教団体には見られないユニークな先見性があると評価している。

また、平和教育という視点を創価学会の仏法の思想と関連させて論じている点にもMétraux独特の着目点が見受けられる。彼は、平和という言葉に関して以下のように述べている。平和は仏法の中でも意味の深い概念で、個人の内的な「心の平和、穏やかさ」という意味から、他者への寛容と共存共栄の精神を含んだ、社会の中での「人々の調和、ひいては国家間の平和」にまでその意味するものは広がっている。創価学会は、仏法の生命尊重の考えから見て、人間の仏性を開き、よりよい人生を送るためには人々の生命が最大限に守られ、認められる平和な社会は不可欠なものであり、尊き人権や生命を損害する戦争のない社会の実現を目指すべきであると主張している。そこで、創価学会の一つの公言されている目標として、真実の恒久平和があげられている。Métrauxは以下のように述べている。⁽¹⁹⁾

One of the professed goals of the Soka Gakkai is the realization of a genuine, lasting world peace. It seeks a global environment where man would live in harmony with his neighbors, problems like the destruction of the environment would be resolved, and

⁽¹⁷⁾ Daniel A. Métraux, *The Soka Gakkai Revolution*, Maryland: University Press of America, 1994.

⁽¹⁸⁾ Daniel A. Métraux, *The Soka Gakkai Revolution*, p. 2.

⁽¹⁹⁾ Daniel A. Métraux, *The Soka Gakkai Revolution*, p. 113.

individuals would be able to maximize their fullest potentials (“value creation”) without inflicting harm on others. The Soka Gakkai has defined peace as harmonious way of life where war never be invoked as a method of solving disputes and man would be free to work not only for the betterment of his own life, but the lives of all other people as well (p.113).

このように創価学会の目指すものとして、仏法を基調とした恒久平和の実現があげられ、それを推進するために平和教育や「核の脅威展」のようなSGIの各種の平和活動が行われている点をMétrauxは高く評価している。⁽²⁰⁾ 創価学会は宗教団体として、仏法を布教するのみならず、仏法を根本に社会の根源的な改革、人々の意識改革、ひいては世界の変革にまで広く意識を向けている。これは、他の宗教には見られない創価学会の大きな特色といえよう。また、SGIは1983年に国連よりNGO団体として活動を認可され、多くの軍縮や平和、教育に関する展示活動を推進している点をあげながら、MétrauxはSGIの広範な平和運動について論じている。⁽²¹⁾

池田自身の平和活動に関しては、1983年以来、毎年1月26日のSGIの創立記念日に「平和提言」を発表し、仏法の人間主義の観点から、平和や軍縮、環境や教育などの地球的課題に幅広く言及している。2005年には、池田が提唱した国連の「人権の教育世界プログラム」「持続可能な開発のための教育の10年」がスタートしている。これらの活動は、「教育は子どもの幸福のためにある」と主張し、軍国主義の日本政府に敢然と立ち向かった牧口初代会長の精神や、原水爆禁止宣言を行った戸田第二代会長の平和を希求する願い、こうした2人の師匠の深き精神をそのまま引き継いでいるものといえ、創価学会の三代にわたる平和への強い思いが、現代に結実している一つの証といえよう。⁽²²⁾

5. その他のSGI研究

ここで、論文を2本ほど紹介したい。一つは、アメリカのSGIに関するもので、もう一つは、ドイツのSGIに関するものである。そこで、池田のリーダーシップがどのように会員に影響を与えるかを分析してみたい。

Snowは*The Future of New Religious Movements*という本の中で日蓮仏法とアメリカの創価学会について、その組織、イデオロギーと活動について論じている⁽²³⁾。彼は、1960年の池田のアメ

⁽²⁰⁾ SGIの平和活動の一つとして、国連を支援しての「核の脅威展」があり、1982年から1988年にかけて世界16カ国25都市で開催した。また、国内では、100点を超える反戦出版（戦争体験集）の編集や、市民に平和を訴える「反戦・反核展」なども各地で開催し、大きな反響を呼んでいる。

⁽²¹⁾ SGIは1983年5月に国連経済社会理事会上に協議資格（諮問的地位）を持つNGOとして正式に認可された。また、1989年にユネスコを支援するNGOとしても正式に登録し、「世界の教科書展」「世界のおもちゃと教育展」など教育への国際的な意義啓発の場として多彩な活動を推進している。

⁽²²⁾ 戸田は、1957年9月8日、横浜・三ツ沢競技場で「原水爆禁止宣言」を発表。原水爆は「生存の権利」を脅かす人類の敵であり、使用者は戦争の勝者・敗者を問わず絶対に許してはならないと強く訴えた。

⁽²³⁾ David A. Snow, 'Organization, Ideology, and Mobilization: The Case of Nichiren Shoshu of America,'

リカ訪問より会員数が大幅に増大しているSGIの組織について言及している。1970年半ばには、SGIの会員数は20万人を超えており、その発展の理由として、彼は創価学会が日蓮仏法の実践による（ある意味即効的にも感じられる）物質的、精神的、身体的「功德（利益）」を約束したことをあげている。もちろん日蓮は、全人類の幸福が達成された時にはじめて一人一人の幸福も完結するという仏の本質を持っているのであるが、御本尊に向かって「題目」を唱えるという毎日の仏道修行と、この日蓮仏法を他者に布教するという「折伏」という行為の2つによって、人は自己の弱い生命を強く開かれたものへと変革することができ、それがひいては幸福の達成、社会の発展に繋がるとしている。つまり、創価学会は、日蓮仏法を基調とする人類の平和と幸福を目指す団体であり、池田の言う「人間革命」を通して一個の人間が新しい自分自身を見出していくことによって、新しい人生を切り拓いていくことができるものであるとしている。そして個人の変革を通して平和で幸福な世界を目指すことを創価学会の究極の目的としている。

Snowは、SGIの発展の要因について、日本の池田の強いリーダーシップにより、多くの会員の信頼と尊敬を得ることになった点についても言及している。また、SGIの教義についても、その經典の学習についてふれている。SGIでは日蓮仏法を学ぶ際に「three proofs」、日本語でいうと三証や三大秘法などの用語について、その經典からも正しく理解し、なぜ日蓮仏法が正しく、なぜその信仰をたもつことがその人にとってプラスになる（利益になる）のかという点を客観的に分析しようとする姿勢が伺える⁽²⁴⁾。この傾向性は、信仰に関して受身的ではなく能動的な選択をする海外のメンバーによく見られるものであるといえよう。また、組織体制に関しても、オープンなネットワークを持ち、かつ会員同士の強固な精神的つながりを可能せしめる階層的な構造をもっている。その中では組織内の連絡伝達が効率的に行われており、非常に機能的であると高く評価している。このように、人的な側面、組織的な側面、また教義的な側面からみてSGIは非常にユニークなイデオロギーを持ち、それが首尾よく成功している状態でアメリカ社会に一つの宗教運動として広がっているとSnowは結んでいる。

池田の功績については、論文中でそのカリスマ的な強いリーダーシップ、また戸田の時代の激しい折伏運動をよりmoderate（穏健）で民衆に受け入れられやすい形に変容させていったこと、またアメリカを皮切りに、今は世界190カ国までSGIの活動を広めたという布教の海外進出に関する貢献などが挙げられている。宗教団体も、限られた国や文化の制約の中で存在することを考えると、布教のやり方も時代や社会背景が変われば変化せざるをえない。その時々で一番適切なやり方を選ぶという点で、彼には先見性があったのだといえよう。

in David G. Bromley and Phillip E. Hammond (eds), *The Future of New Religious Movements*, Macon Georgia: Mercer University Press, 1987.

⁽²⁴⁾ 三証は日蓮が宗教の正邪を見極めるために用いた判定基準のことで、文証（証文）・理証（道理）・現証（実証）の三つをいう。三大秘法は英語で、「three great secret laws」となり、正式には「法華本門の三大秘法」という。「本門の本尊（人本尊が日蓮大聖人、法の本尊が、事の一年三千の南無妙法蓮華経）」「本門の戒壇（事の戒壇が本門の本尊所住の処、義の戒壇が本門の本尊を安置し、受持するすべての処）」「本門の題目（信の題目とは、本門の本尊を信じること、行の題目とは南無妙法蓮華経を弘める化他の実践）」をさす。（創価学会教学部編『教学の基礎 仏法理解のために』聖教新聞社、2002年）

2つめの海外での布教の例として、ドイツSGIについて書かれた論文をあげてみることにする⁽²⁵⁾。Ionescuは、日本の仏教である日蓮仏法が、どのような形でキリスト教の宗教的土壌のあるドイツで布教されていったのかについて論じている。2000年当時は、ドイツSGIの日本人の割合はわずか5%であり、残りはドイツ人、他のヨーロッパ系人種が会員を占める。

SGIの布教が成功した一つの理由として、まずは現地の文化や風習に適應する形で布教を進めたことがあげられる。仏法でいう随方毘尼の教義を用いて、本質的な教えに背かない限り、その社会の特質や時代の風習に合わせて布教を行ったのである⁽²⁶⁾。そしてその際に宗教を単に神秘的なものにとらえるよりも、実質的な利益を得る手段として位置づけることにより、祈ることで実際の功德（例えば、良い就職先や経済的成功、人間関係の改善、病気の克服など）が得られる点を強調したことをあげている。つまり、瞑想をしたり、はっきりしない対象に向かってただ祈ったり拝んだりする宗教ではなく、生活に密着した問題を解決し、より幸福な人生を築くための宗教であることが明確に示され、そしてその方法が分かりやすく現地の風土に合致したやり方で広められていったことが布教が進んだ一因といえよう。

終わりに

本稿では海外（英語圏）で出版された創価学会研究・池田研究について、レビューを行うことを目的とした。当初、2000年代までのレビューを目標に文献調査を始めたが、90年代以降の論文があまりに多く、今回は60年代から80年代までと比較的初期の創価学会の発展から第二次専門問題前までの時期について言及した書籍や論文にとどめることとした（多少ではあるが、1994年のMetrauxの著作と2000年のIonescuの論文についてもふれることとなった）。

今回のレビューを通して、著作や論文の中で論じられていたことを大きく3つの論点からまとめてみたい。まず1点目は、創価学会の発展の理由だが、これは、今回あげた多くの著作では、戦後の不安定な社会情勢と精神的よりどころを求める人々の要望が創価学会という宗教団体の理念と布教の勢いと合致したという日本の歴史的・社会的背景があげられた。次に、日蓮仏法の教義が非常にシンプルなものであり、かつ実用的で現世利益を約束するものであった点があげられた。さらに、三代会長それぞれのリーダーシップが強く、会員をひきつける魅力と引率力に優れていたことと、加えて組織が縦の連携と横の連携をバランスよく組んであり、強固な構造を持っていたことがあげられた。

2点目に、海外研究のユニークな点としてWhiteの三代会長の人物像や役割の比較研究が見られた。彼は、牧口初代会長を「学者」、戸田二代会長を「優れた宣伝マン」と、そして池田を「紳士

⁽²⁵⁾ Sanda Ionescu, 'Adapt or Perish: The Story of Soka Gakkai in Germany,' in Peter B. Clarke (eds), *Japanese New Religions in Global Perspective*, Richmond: Curzon Press, 2000.

⁽²⁶⁾ さまざまな文化の多様性を認め、その在り方を最大限に尊重する仏法の考え方から出てきた法理の一つである。「随方」とは、地域の風習に随うことであり「毘尼」とは、戒律の意味である。仏法の根本の法理に違わないかぎり、各国・各地域の風俗や習慣、時代の風習を尊重し、それに随うべきであるとした教えである。

的で国際的」であると評し、それぞれの違いを鮮やかに描くとともに、各会長在任の時代に応じた創価学会の発展のあり方に、それぞれのリーダーシップが見事に合致していたことを示した。宗教を歴史的視点で見るときに、その時代時代におけるリーダーの役割が正しく遂行されているかを検証することは非常に重要であり、その意味で、彼の論点は新しい知見を提供しているともいえよう。

3点目として、池田の創価学会に、そして日本社会に対する功績について論じた点について述べたい。1960年代の著作では、戸田の時代に激しい勢いで展開していた折伏のスタイルを、当時の民衆により受け入れられやすい形に徐々に変容させていったという点、つまり時代の要望に合わせて組織の動向を敏感に察知し、一番適切な方向に統率するという池田のリーダーシップの優秀さがとりあげられている。さらに、戸田の時代には「東洋広布」という言葉で表されていた、創価学会の海外への布教活動を具体化し、「世界広布」を現実のものとした点に彼の活躍が高く評価されている。1960年に池田の初の海外訪問が始まり、創価学会の海外組織の拡大にともない1975年にSGIが発足し、池田はSGI会長に就任した。現在では世界190カ国にSGIのメンバーを擁するまでになっている。これは、海外での布教活動、SGIの活動の広がりにも池田のリーダーシップが反映されていることの現れといえる。日蓮正宗の体質はあまりに封建的で前時代的であったが、その日蓮仏法の教義を大衆にも理解しやすいものとして現代によみがえらせることができたのは、池田の一つの大きな功績といえる。彼が現代に即して布教をすすめ、その国の文化や慣習に逆らうことなく、地域風土にあわせた布教のやり方を行うという対策が効果的にとられてきたことの結果といえよう。

さらに1980年代になると、創価一貫教育についても言及する論文が増えている。もともと初代牧口会長が教育者であり、創価学会の前身が創価教育学会であったこと、池田も教育を最後の事業として位置づけていることから、創価学会は一宗教団体としてだけでなく、教育という営みに価値を置き、幼稚園から大学、大学院まで一貫した機関も併せ持つことで理想的な人格的基盤を持った人材を養成するシステムを後世に残したという点をMétrauxは高く評価している。

これら、Brannen, White, Datorの研究は、創価学会の歴史的な流れや三代会長のリーダーシップについての言及に関しては、海外の研究者からみた創価学会研究として価値のあるものといえる。しかし、史実的な部分などから見て1960年代という今から30年以上も前の文献であるがための正確性に関する限界も見られる。Métrauxの研究は80年代ということで、60年代以降のSGIの海外活動の発展や、創価一貫教育への言及があるという点で新しい視座を提供している。さらに、文献研究のみならず、彼自身が日本に研究員として滞在する中での会員へのインタビューも含めた実地調査をふまえて、日本の宗教哲理や実際の創価学会の組織についての分析を行っている点に関しては評価できるといえる。すでに1960年代という段階において、創価学会や池田に関する研究者が存在したということは着目すべき点であり、加えて現代の池田研究に関する視点は決して真新しいものではなく、40年近く前から深められてきていたという点を忘れてはならないであろう。

海外の研究をレビューすることは、海外の学者の視点を学ぶだけでなく、そこで論じられてい

る日本における学会像・池田像を知ることで、日本ですでに評価されている池田とは異なった観点から彼の思想や活動について学ぶことができるといえ、今回新しい視点を提供してくれる論文もあった。さらに、今後は海外の学者が指摘したり注目をするが、日本ではあまり論じられていない部分、また逆の論点（日本ではよく議論になるが、海外ではふれられていない部分）が存在するのかどうかについても検討を重ねていきたい。この海外の創価学会・池田研究のレビュー・分析は地道な作業であるともいえるが、今後の池田研究の軸や注目すべき論点についても考察を深めることができるという点で、意義のあるものであるといえる。1990年代以降の海外研究のレビューに関しては次回につなげて参りたい。今後の課題としては、1960年代、70年代…90年代、2000年代と時代を追っていくことで、それらの時代に出版された研究の視点・論点の変化や時代を貫く共通点などについて着目していきたい。